昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成15年9月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

## No.382

2003 SEP

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN　HAJ

# 2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

## カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1．期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2．募集人員：10名程度
3．負担金：75万円
4．資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5．申込〆切：11月30日（定員になり次第〆切）
6．その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

## チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰（北峰）を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1．期間：2004年7月22日～8月27日（37日間）
2．募集人員：10名程度
3．負担金：85万円
4．資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5．〆切：定員になり次第
6．その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

**表紙写真**

スジティラ（6,373m）。私はこれから登るべき壁を注意深く検討した。双眼鏡で南西壁を上下に1㎞ほど眺めまわしたところ、期待と予想に反して、壁全体にテントを張れるような、あるいはビバークするための僅かな棚も突起もないことが分かった。しばし呆然となった。壁全体の傾斜は60～70度ぐらいあろう。頂上直下の最後のピッチはもっと急傾斜のようだ。我々はC1から一気呵成に登攀をしなければならない、と明確な決断をくだす。（本号記事参照）

# ヒマラヤ No. 382


1．東部ガルワール・ヒマラヤ　スジティラ（Sujtilla）西峰6,373m登頂－2002年
8．[連載] 日本ヒマラヤニスト名鑑（2）
10．ロー・マンタンの空、遥かなり（13）　高橋　照
16．ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
18．新疆ウイグル自治区登山の和文参考資料（1979年開放以後のもの）
24．寸感・事務局日誌

# 東部ガルワール・ヒマラヤ

## スジティラ（Sujtilla）西峰6,373m登頂－2002年

サティアブラタ・ダム　　中村　保 訳・構成

今年、2003年の２月にインドのムンバイで行なわれたヒマラヤン・クラブの創立75周年記念行事に坂井広志氏が日印合同東カラコラム遠征隊の登攀隊長の立場で、また中村は『チベットのアルプス』のスピーカーとして招聘された。それがきっかけで、インド海軍登山隊の東部ガルワール・ヒマラヤのスジティラ（Sujtilla－注記：以前はスイティラSuitillaと表記されていた）登頂の記録を日本の山岳ジャーナルに載せる手配をしてくれないかと、ヒマラヤン・クラブと遠征隊の隊長、サティアブラタ・ダム（Satyabrata Dam）氏から依頼をうけた。ダム氏は私への手紙のなかで、このピークに関する特別ノートとしてこう述べている。「登頂した後、地図を克明に調べた結果、英国のクライマーと我々インド海軍の両隊が登ったのは6,373mのスジティラ西峰であるとの結論に達した。西峰より僅かに高い6,394mの東峰は未踏のまま残されている。」結果としては、英国隊が初登頂をし、インド隊は第二登、第三登となった。彼らの成果は紹介する価値があるかどうかを山森欣一氏に糺したところ、このピークのあるナンダ・コートの東側は比較的人の入っていない山域なので紹介する意義はあるとの見解であった。　　（中村　保）

### スジティラ登山隊の構成

－ 海軍のメンバー －

| | | |
|---|---|---|
| 1．Satyabrata Dam | 隊　長 | 37歳 |
| 2．Amit Pande | 副隊長 | 28歳 |
| 3．Amit Rajora | | 30歳 |
| 4．KS Balaji | | 32歳 |
| 5．PS Vombatkere | | 34歳 |
| 6．Prashant Srivastava | | 31歳 |
| 7．P Anand | | 33歳 |
| 8．Raj Kumar | | 35歳 |
| 9．A Chowdhury | | 30歳 |

－ 撮影隊のメンバー －

| | |
|---|---|
| 1．Divyesh Muni | 37歳 |
| 2．Vineeta Muni | 35歳 |

－ シェルパ －

| | |
|---|---|
| 1．Tenzing | 32歳 |
| 2．Tsange　Puri | 34歳 |
| 3．Nima　Thondup | 34歳 |
| 4．Nima　Dorje | 21歳 |
| 5．Ongta | 28歳 |

### 遠征の日程－2002年

９月15日：朝ニューデリー発、車にて。

９月16日：夕方遅く道路の終点ムンスヤリ(Munsyari)着。

９月17-18日：再梱包、装備・食料・ケロシンオイル・テントその他をポーターに配分。

９月19日：朝ムンスヤリ発、トレッキング開始、パトン(Paton)泊。

９月20日：パトン発、急な登り下り、深い森の中のリウンラニ(Liungrani)に露営。

９月21日：リウンラニ発、ララム川の橋を渡り、恐ろしい地滑りに２ヵ所で遭遇。はるか眼下に泡立ララム川。さらに上ってキルタム(Kiltam 3,350m)泊。

９月22日：キルタム発、人家のある最後の村ララム(Ralam)泊。

９月23日：ララム発、ベース・キャンプBC設営(4,260m)。

９月25-28日：ABC荷揚げ､28日にABC設営(4,670m)。

９月29日-10月１日：C１へ荷揚げ、10月１日にC１設営(5,350m)。

10月２-11日：本格的な登攀。10月６日に第一グループの３人が登頂、10月11日に第二グループの６名が登頂。

10月12-14日：ABCとBCを撤収。

10月15-17日：道路の終点までトレッキング、10月17日にムンスヤリ着。

10月18日：ムンスヤリ発、車にて。

10月19日：ニューデリー着。

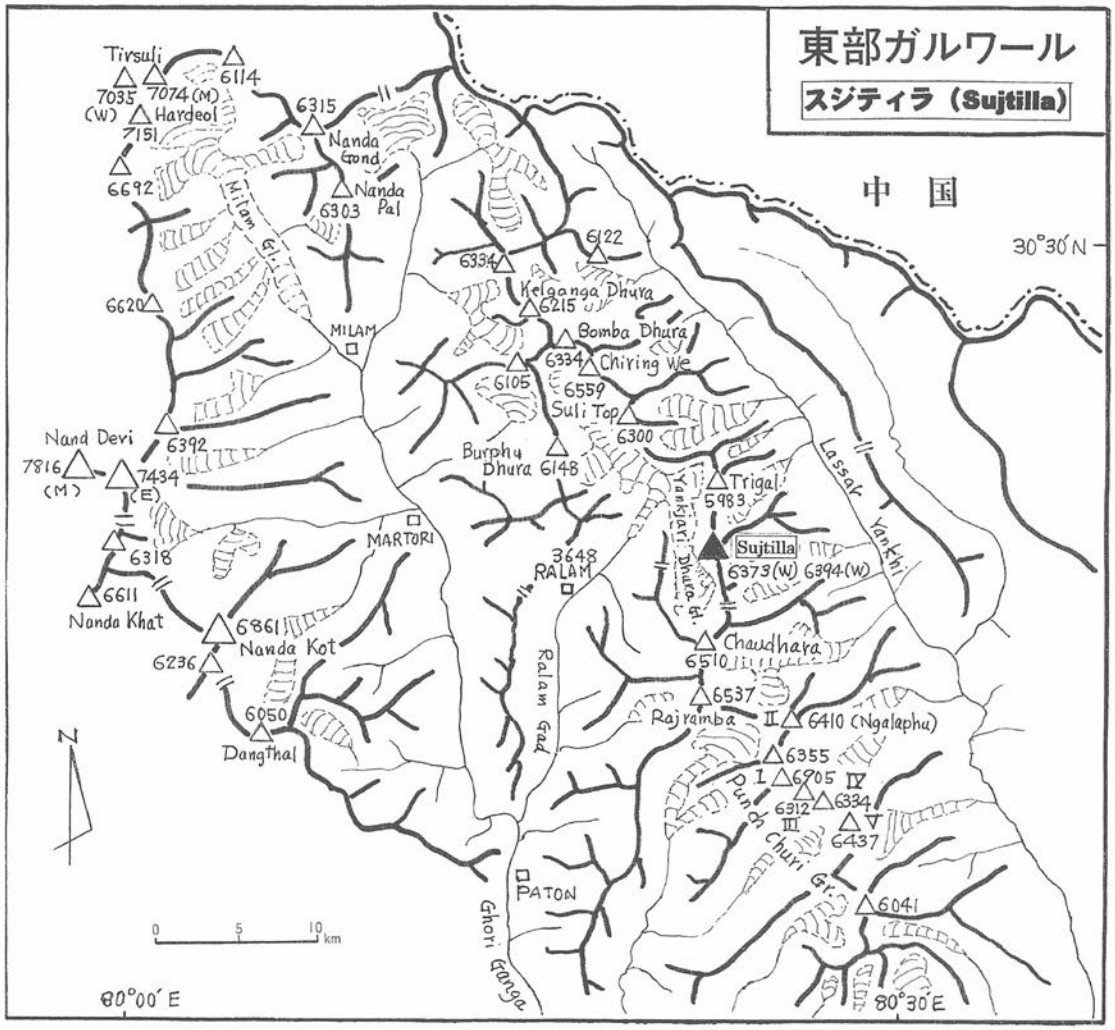
# スジティラ(Sujtilla)登頂－9名が頂上に立つ

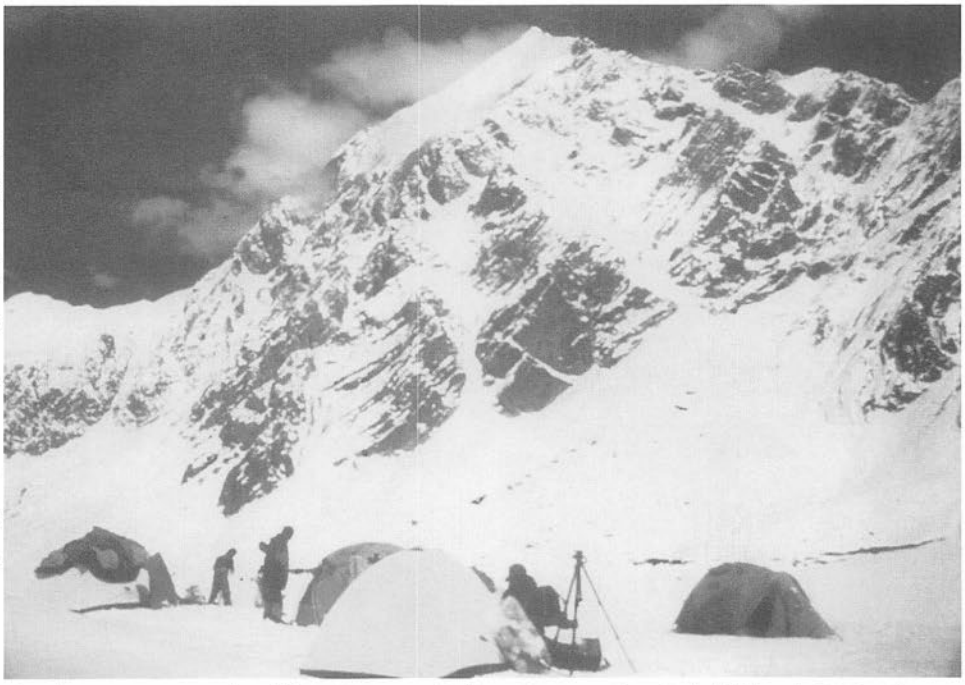
ヤンクジャリ・ドゥラ(Yankjari Dhura)氷河の上に針のように天空に聳えるスジティラ(6,373m)はインド・ヒマラヤで最も美しい造形の山であると、しばしば多くの人たちから言われてきた。優秀な登山家によって過去四回登頂が試みられたが、未踏のままで残されていた。迷路のように入り組んだ氷雪の襞、落石、難攻不落の複雑なリッジと側壁は人間をスジティラの頂上に近づけなかった。

インド海軍登山隊は2004年春にエベレストを計画している。その準備段階の最初の遠征として、私は2002年のポスト・モンスーンの時期にスジティラの処女峰に挑戦することを決定した。

最終的にニューデリーに集結した9人のメンバーのうち7人は登山の遠征隊に参加したことは一度もなかった。ある程度困難な登攀をこなし、訓練をうけ、救援活動の経験があるのは、私と副隊長のアミット・パンデ(Amit Pande)だけだった。ディェッシュ・ムニ(Divyesh Muni)とビニータ・ムニ夫婦が撮影隊として同行した。彼らは高所でのクライミングと写真撮影に長く関わってきた優れた登山家である。我々は9月15日にニューデリーを出発した。9月23日にBCを設営するまでの行程は前記の通りである。

9月25日、重いザックを背負って前進キャンプABCへの荷揚げを開始する。一旦4,828mの高い峠、ヤンクジャリ・ドゥラ・パスを越えヤンクジャリ・ドゥラ氷河に下り、9月28日に4,670mの地点にABCを設営した。



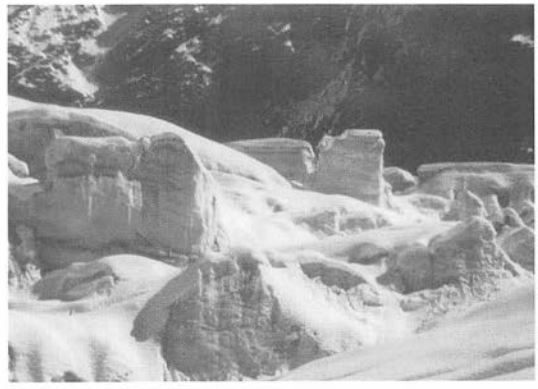


スジティラ北西壁の下、ヤングジャリ・ドゥ氷河上のABC（四六七〇メートル）

9月29日、快晴、寒い。ABCから上へ荷揚げを開始する。氷と岩のミックスの斜面を辿り、クレバスを横切り、徐々に高度を上げてゆく。荒れたメイン・アイスフォールに入る直前に、BCに戻る途中のインド・英国隊の連絡官とシェルパに会う。このチームは我々より一週間早く入山していた。二人の英国人（ジム・ロウサーとグラハム・リットル）は最初北壁を登ろうとしたが、彼らの力量では技術的に困難で危険すぎることが分かったので、南西壁にルートを選んだ。彼らは私の古い友人である。彼らのニュースを聞いて嬉しかった。我々は、アイスフォールと恐ろしいクレバスを通過する英国人のルートに合流した。四時間後、巨大なクレバスとベルグシュルンドに囲まれた氷の狭いが棚に到達した。標高5,350m、そこをC1の候補地に考えた。ジムとグラハムはテントと装備をたたんでいるところだった。楽しい邂逅だった。お互いに写真を撮り合った。

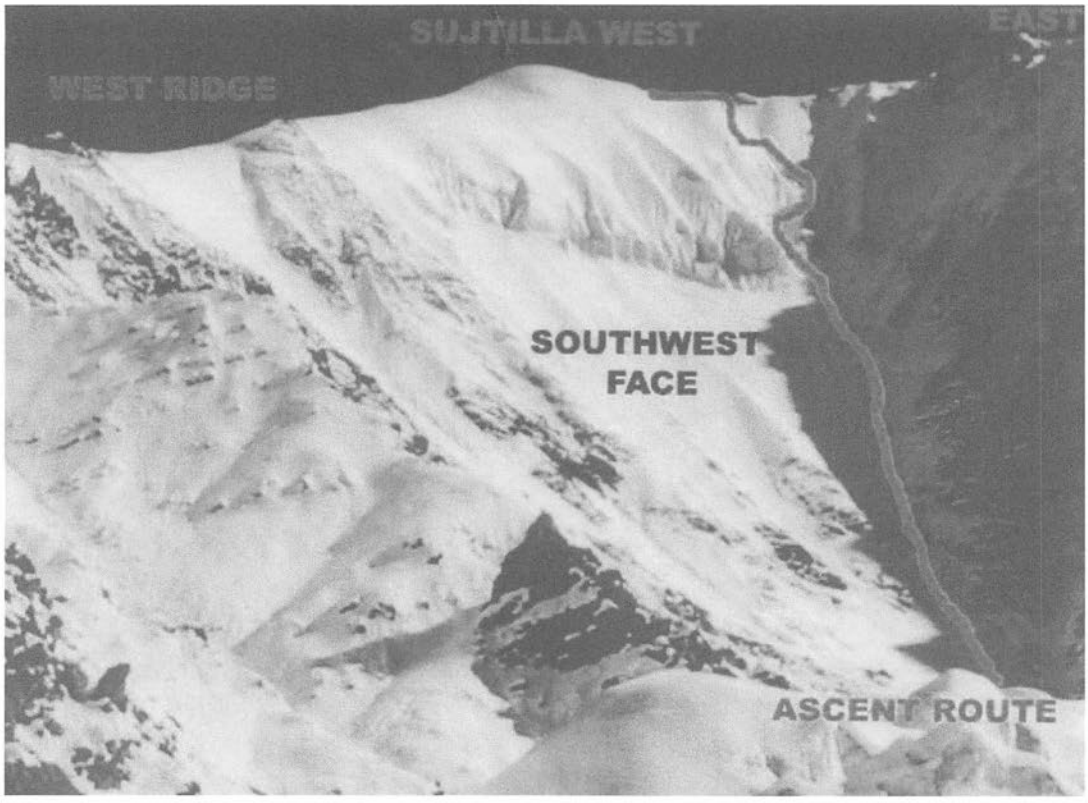
ジムが彼らのルートを説明してくれる間、私はこれから登るべき壁を注意深く検討した。双眼鏡で南西壁を上下に1㎞ほど眺めまわしたところ、期待と予想に反して、壁全体にテントを張れるような、あるいはビバークするための僅かな棚も突起もないことが分かった。しばし呆然となった。壁全体の傾斜は60～70度ぐらいあろう。頂上直下の最後のピッチはもっと急傾斜のようだ。我々はC1から一気呵成に登攀をしなければならない、と明確な決断をくだす。とは言え、克服不可能な仕事ではないが、未経験者が多いチームが、ひどく腐った氷と岩の状態からして危険に曝されることに違いないことも事実であった。岩は非常に脆く、スラブをグズグズに積上げような状態なので、少し触れただけで崩れ落ちる、とジムも言った。氷は青黒く、無数の小さな岩が混ざっている防弾帯のようである。が、日が照り始め氷の表面が融けだすと、岩の礫がミサイルのように下に向かって発射される。

ABCに戻って夕食後、二人の英国人と意見交換をした。我々の往く手には極めて危険できつい仕事



▲C1へのアイス・フォール

Sujitilla スジティラ西峰




が待ちうけていると推量する。技術的に困難な山であるだけでなく、スジティラは両側が切れ落ちた幾つものリッヂが複雑に組み合されていて、リッヂの上には大きな雪庇と岩が断続する。冬が近づいているので、気温は一日ごとに下がってゆく。夜の気温はマイナス6℃まで下がり、穏やかな風がテントを波立たせる。

9月30日もいつものように晴れ渡る。心地よい。一日の天気のパターンが分かるようになった。午前中の素晴らしい好天は午後になるとやってくる雲と雪の前触れにすぎない。午後二時頃に降雪が始まり、夕闇近くになるとおさまる。我々がルートを先に延ばしている間、メンバーの一部はBCに戻り、スジティラの真西の尾根上にある均整のとれた頂上に見入っていた。それは僅か5,320mの高さにすぎず登ることは難しくないが、登ってみたいピークである。翌日登る許可を与え、ララム・ウエ峰と命名した。この登攀の最大の利点は頂上からスジティラ南西壁と山塊全体の素晴らしい眺望を得られることである。記録のために貴重である。

10月1日、ララム・ウエ登頂の四名の隊員と一人のシェルパは午前5:15にBCを出発した。一方我々は荷物をまとめテントをたたんで午前7:15にC1へ向け出発した。副隊長のアミット・パンデ(Amid Pande)、撮影隊のディビェッシュ・ムニ(Divyesh Muni)とビニータ・ムニ(Vineeta Muni)の夫婦と私はシェルパのツァンゲ・プリ(Tsange Puri)とニマ・ソンダップ(Nima Thondup)と一緒にC1に留まり、シェルパのオンタ(Ongta)とニマ・ドルジェ(Nima Dorge)はABCに帰った。アミット・ラジョラ(Amit Rajora)とラジ・クマール(Raj Kumar)はBCからABCに加わった。彼らは後方部隊として我々を支援する。太陽が照りつけ猛烈に暑い。

ララム・ウエ隊はゆっくり、しかし着実に登り、午前11:15頃頂上に着いた。遠征隊にとって最初の登頂であり、しかも我々が知る限り初登頂である。拍手喝采する。我々はすぐC1地点に到着、テントを設営する。スジティラ南西壁は輝く太陽に磨かれたガラスのように煌いている。魅惑的に人を惹きつける。壁全体が雪崩と落石に曝されていて、その傷跡が生々しいが、我々は氷と岩の迷路のな

かになんとか可能な登攀ルートを切り開いた。

10月3日、午前4:30ジャストに出発、漆黒の闇を照らすヘッドライドをつけて登る。ユマールでロープを辿り、7:00に昨日の到達点に着く。そこから先は非常に急峻で、二重の確保をしてルートを開いた。この地点で我々は最初のロック・バンドの上部の縁に平行して進んだ。直上する樋状の氷の急斜面を避け、ジグザグにルートを選び、より安全そうなロック・バンドの上のアイス・プラトーを登攀することにした。しかし、四ヵ所穴を掘ったところ、まずいところに居ることがわかった。氷の厚さはたった2～3㎜しかなく、見かけとは反対に極めて不安定であった。氷はグズグズに詰った平たい岩のスラブ帯を覆っていた。四ヶ所とも足掛かりがなかった。身体を上方にずり上げようとする動作の慣性によって、重力に逆らって立っていた。この姿勢は長続きせず、落ちるだろうと予感し、岩のオーバーハングの下に隠れて確保していたツァンゲに叫んで警告し、下降の第一歩を踏み出すために右手のアイス・アックスを引き抜いた。瞬く間に私は落下した。本能的に足を開き、両方のアックスを雪のなかに突き刺した。岩雪崩が転がり落ちる私の身体の後を追った。しかし、弾丸をもはじき返すほど硬い黒光する氷が詰まるガリーに抛りだされ、真逆さまに落ちていった。岩と氷の出っ張りに当たってヘルメットが何度も音をたて、神経にガタガタと響いた。そして直ぐ、生きたまま逆さにぶら下がっている自分に気付いた。驚いたことに骨折していなかった。視界を取戻し姿勢を立て直すのにしばし時間がかかった。こんがらかったロープの結び目から脚を抜いているとき、左足と左の肩そして感覚を失った右腕に切り裂かれるような激痛が走るのを感じた。ゴアテックスのアウター・ジャケットの袖は裂けていた。心配そうにじっと見ている上にいる仲間に手を振って合図した。重力に逆らう体操をして真直ぐ立った。私は20メートルほど落下していた。教科書通りに一歩々々登り直しているとき、アイゼンの先端の間に約1,500フィート下のアイス・プラトーへ下るルートの全容が見えた。ビレー地点に戻りしっかりした足場を確保した。仲間たちは避けて通れない氷の樋を真直ぐ登り、ロープを二ピッチ固定した。

▼南西壁上部（2人のクライマーが中央にいる）

我々は約5,850mに達しC1に下った。

10月5日、ディビエッシュ、ツァンゲ、ソンダップが登って行った。パンデを一日休ませた。ルートは開かれ、垂れ下がる氷壁の少し東側、オーバーハング気味の双子岩のところに80メートル弱のロープを固定した。これで6,000mを超える所までルートを延ばしたと判断し、翌日最初の登頂を試みることにした。他のメンバーはABCに戻った。低いところで休む必要があったツァンゲもそうした。彼の代わりにニマ・ドルジェが上がってきて、翌日我々と登ることにした。物静かで控えめなドルジェはダージリン出身の素晴らしい若者である。かれは最近技術的に非常に難しいラムジャック(Ramjak)に登っている。したがって、第一登頂隊はディビエッシュ、パンデ、ニマ・ドルジェと私の四名で、ニマ・ソンダップはサポート隊としてビニータとともにC1に残ることになった。

10月6日は申し分ない登頂日和だった。山は穏やかであった。極度に技術的で難しい登攀とルート工作を強いられたが、真に危険に遭遇することはなかった。好天は我々の期待以上に長続きした。本番の登頂は10月5日の午後11:00に登頂隊のお茶づくりの時から始まっていた。固定ロープの最上

部に到達するのに6時間かかった。連続する岩とアイス・フォールは上方の視界の大半を遮っていた。周囲の谷は陽光に輝いていた。我々はさらにロープを固定した。西側にいくらか離れた幾つかの場所に英国のクライマーが置いていったプロテクションを目にした。このことは我々が正しいルートを登っていることの証左であった。高度を上げるにしたがい、スジティラの頂稜は三つ以上のピーク(瘤)で成り立っていることがはっきりしてきた。それらはどれも同じ高さに見えるので、一見どのピークも頂上と認定することができた。英国隊は、北から見えるスノー・ドームの近くの頂上に達したと主張していたので、我々は可能ならさらに東のピークまで行こうと決めた。

昨日の到達点から先はパンデとニマ・ドルジェがリードした。私は一ピッチ後をついてゆき、黙々と辛抱強く観察しながら、彼らを邪魔したり、取って代わるようなことはしないと心に決めた。パンデを独力で登らせ、自信と目的意識をじょじょに教え込み、将来に役立たせたいと考えたからである。登攀は急峻で辛かった。傾斜は70度前後、途中で止まれるような場所はどこにもなかった。午後2:15頃、6,285mの地点に到達、そこから約100メートル先に頂上の瘤が見えた。一ピッチ手前で、我々は岩の露出した瘤に向かう当初の計画を放棄した。行く手の雪の斜面は極めて危険で雪崩に曝されていたので、スノー・ドームに直上するクーロワールに入るために一旦引き返した。

今、頂上は手に触れられるほど近いところにあった。暗く不吉な雲が近くのピークに集まり、氷雪がつくる霧が下から渦巻いて昇ってきた。この地点で私は引き返す決心をした。スジティラは10年以上も夢の山であり続けた。頂上に行きたいたと常に望んできた。しかし、この先困難で危険な部分はもうないと判断したとき、頂上へこんなに近い所から登らずに下る決心が簡単にできた。リーダーとして為すべきもっと大事な目的がある。夢は夢としてそのまま残しておこう。他の三人が必ずや頂上に立ち、インド海軍が世界の登山界の第一線に仲間入りすることを確信していた。私は彼らの手を握り、急で真直ぐな雪の斜面の終わりにある頂上に最後の一瞥をくれて下降を始めた。すぐ吹雪になった。始めは穏やかだったが、少しするうちに一寸先も見えなくなった。上にいる三人のクライマー

は私の視界から消えた。私の周囲も何も見えなくなった。C１に倒れこんだとき、ビニータが抱え込んで挨拶してくれ、リッチなコーヒーをもてなしてくれた。さらに、三人は午後15:39に登頂に成功したという嬉しいニュースを聞かせてくれた。二時間後に全員がC１に戻った。

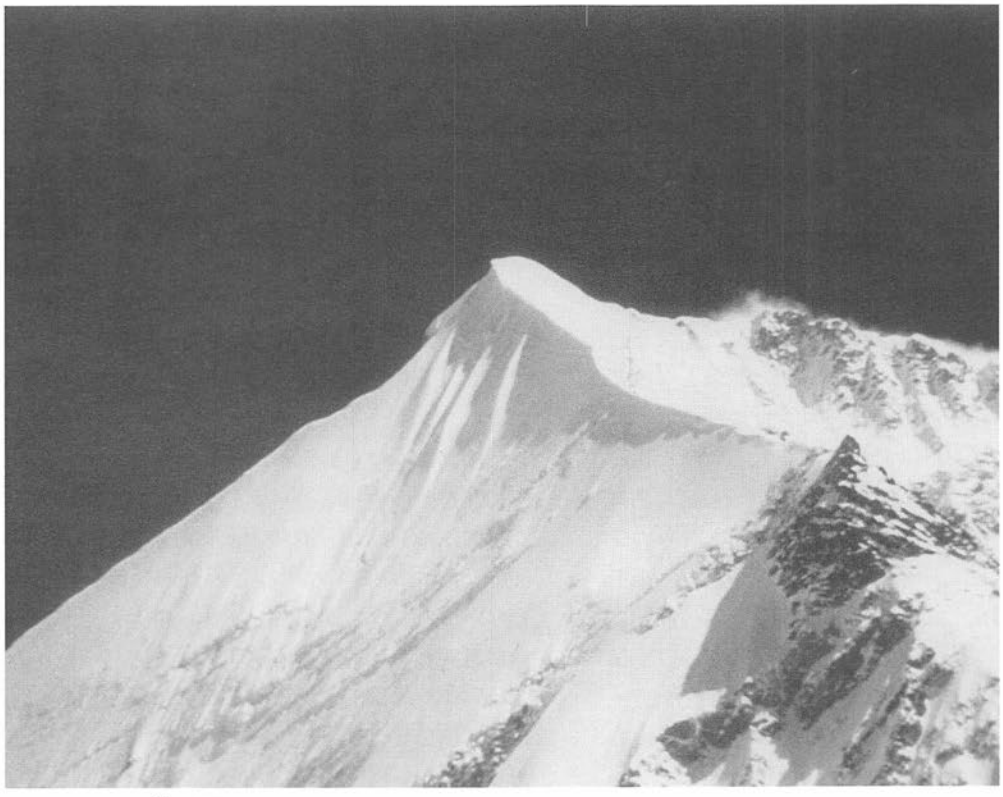
翌日は休養と体力快復にあてた。正午過ぎに直ぐ雪が降り始め、冷たい疾風が吹き、時間が経つにしたがい強くなった。パンデと私は先のことと第二次登頂をどうするかを議論した。午後二時頃から風雪は荒れ狂ったように激しくなり二昼夜続いた。我々は本格的な嵐の真っ只中にいた。風雪ははますます猛威をふるった。突風に煽られた雪があらゆる方角から滝のように流れ、斜面を伝い我々の小さなテントに洪水のように降り注いだ。風の強さはテントを根こそぎに我々をこなごなに吹き飛ばすのではないかと怖れるほど狂暴であった。夜中じゅう雪は降り続け35センチ近く積り、いたるところで雪崩が起きやすくなった。我々はしばしC１を放棄しABCに下り、次の攻撃まで山の状態が安定するのを待つことにした。

10月８日の明け方は晴れていたが、気圧は低いままだった。我々が登攀した壁全体が厚い雪で塗り固められ、固定ロープの痕跡はどこにも見えなかった。アイス・フォールを通過してABCへ行くルートも新雪の下に完全に埋まっていた。身体は一歩ごとに雪のなかに沈んだ。C１に一つのテントと三日分の食料を残してABCに帰った。

10月９日天気は少し良くなったが、チベット高原から非常に冷たい風が吹いたので、一日中ほとんどテントの中ですごした。夕方になると再び吹雪になった。10月10日の早朝、第二次登頂隊がC1へ向け出発した。

10月11日、四人のメンバー、バラジ(Balaji)、ラジョラ(Rajora)、ラジ・クマール、チョウドゥリー(Chowdhury)と二人のシェルパ、ツァンゲとニマ・ソンダップが真夜中に出発し、午前８:05にスジティラの頂上に立った。全員正午までにC１に帰着した。予測した通り、午後二時頃には空は暗くなり、雪が新たに威勢よく降り始めた。

次の二日間はABCとBCの清掃を行ない撤収の準備をし、帰りのキャラバンのため荷物を整理した。二日以上かけてキャラバンはみずみずしい緑の森と畑を通り、ゆっくりと、時には転びながら進み、10月17日に最終的にムンスヤリに着いた。我々のスジティラの冒険談は終わった。それは冒険と発見の忘れ難いジャーニーであった。



▲スジティラ北西面

## ［連載］　日本ヒマラヤニスト名鑑（2）

### 小川信之（OGAWA Nobuyuki）

1944.11.14～1978.8.1

千葉県八日市場市生れ。家業の印刷会社に勤めながら登山を続けていたが、丹沢で深田良一に会ったことがきっかけで20歳で山学同志会に18期生として入会。66年（夏）前穂高岳屏風岩東稜～東壁右岩稜～北穂高岳滝谷グレポン継続登攀。67年（冬）谷川岳一ノ倉沢烏帽子沢奥壁凹状岩壁登攀。68年（冬）鹿島槍ガ岳荒沢奥壁南壁～北壁継続登攀など、岩登りを中心に経験を積み、1970年（冬）遠藤二郎ら5名とアイガー北壁ジョン・ハーリンルート第2登に成功しアルプス・デビュー。71年（夏）高久幸雄、小笠原三郎、渋谷茂とモン・ブランのイタリア側フレネイ中央岩稜を二日間で完登、日本人初登であった。さらに高久、渋谷とブルイヤールの赤い岩稜をほぼ一日で完登。これも日本人初登となった。翌72年（冬）今度は伊藤礼造をパートナーとして4日間の苦闘の末、赤い岩稜の積雪期初登攀に成功し、小川は同志会の中核を担うことになる。帰途、高久とネパールに向かいアンナプルナⅡ（7,937m）の偵察を行った。

73年（春）山学同志会から初のヒマラヤ登山隊がアンナプルナⅡに派遣されたが、同年秋のＲＣＣⅡによるエヴェレスト南壁登山に参加するものも出て、嶋村幸雄隊長以下6名の編成となった。小川はⅣ峰（7,525m）には登頂したものの、Ⅱ峰は頂上ピラミッド基部（7,300m）で待機。近藤克之が一人登頂に成功した。（夏）ヨーロッパに渡り、71年冬、グランド・ジョラス北壁で凍傷となってリハビリ中の小西政継をヨーロッパに呼んだ。モン・ブランのノワール針峰西壁を大木敬一と組んで二日間で完登。小西をプトレイ大岩稜縦走に誘ったが、雨と雷でモンジーノ小屋で停滞となり、ここで小川はジャヌー登攀を小西と相談。（秋）小川は中近東を経由してネパールへ入り3名の仲間とジャヌーを偵察。76年（春）小西政継隊長以下16名の登攀リーダーとしてジャヌー（現在クンバ・カルナ 7,710m）北壁隊に参加、5月11日午後2時過ぎ、小川は北壁からの第一登頂者としてジャヌーの頂きに立った。78年8月1日、穂高岳涸沢に入山途上、横尾谷にて心臓麻痺のため死亡。下町っ子らしい気っぷくの良さで「ノブさん」の愛称で誰からも慕われていた。遺稿・追悼集に「軌跡　小川信之の記録」（1979年）がある。

### 寺西洋治（TERANISHI Yoji）

1945.8.30～1981.8.

広島県佐伯郡五日市町生れ。1964年三菱重工業に入社してから登山を始める。67年広島山の会入会。69年唐沢岳幕岩山嶺第一ルート第二登。70年正月城山和彦と山嶺第一ルート冬期初登攀に成功した。73年（夏）ヨーロッパ・アルプスは天候不順でマッターホルンのヘルンリ稜からの登頂とモンブラン登頂を果たす。74年夏、海谷山塊千丈ガ岳南西壁広島ルート初登攀。76年正月同ルート積雪期初登攀。75年（夏）カラコルム、カンピレ・ディオール（7,143m）に圓田慶爾、森栄、高見和成らと遠征、6月14日初登頂に成功した。77年夏日山協派遣のＫ2登山隊に参加、第一次アタック隊員に選ばれるも8,100mで断念。Ｋ2からの帰途、渡辺優と二人でインド、ヒマチャル・プラデシュのムルキラ（6,517m）に向かいピッケルも無いままアルパイン・スタイルで10月10日登頂に成功した。79年（夏）広島山の会の隊長としてカラコルム、ラトックⅢ（6,949m）の岩壁ルートから森、高見らと初登頂に成功。81年（夏）京都カラコルムクラブ隊に参加して中国、コングール（7,719m）に向かう。イギリス隊の登山が優先されたため、まずムスターグ・アタ（7,546m）で高所順応登山を行い6月下旬、鴫満則、松見新衛とスキーで登頂した。コングールはこの3人が北稜からアルパイン・スタイルでの登頂を試みた。しかし、7月20日に9日分の食糧を持ってＢＣを出発した3人は23日の午前11時頃、北稜上部に広がる大雪壁の6,500m付近にいるのが確認されたのを最後に生還しなかった。24日から30日までは付近一帯が悪天候に見舞われており行方不明のままとなった。寺西は74年茨城、80年栃木国体に参加経験がある。遺稿・追悼集に「ミンタカの白城」（昭和58年）がある。

**竹中　昇（TAKENAKA Noboru）**

1952.9.19～1981.1.12

兵庫県豊岡市生れ。中学で山岳部に入ってから登山開始。68年奈良市立一条高校山岳部に入部。その年鳥取県大山で行われた「全国高校登山大会」に県予選を勝ち抜いて出場。72年早稲田大学山岳部入部。穂高岳、剣岳などを中心に登る。75年ＪＡＣ学生部委員長。76年３月、恵秀機と黒部大タテガビン第一尾根～八ッ峰三稜～八ッ峰～池ノ谷。（秋）ＪＡＣ学生部主催のインド、ガルワールのドゥナギリ（7,066m）登山に参加し、未踏の北稜から10月21日、大杉直彦、酒井敬士と初登攀に成功。77年３月、山崎祐和と鹿島槍ガ岳天狗尾根～黒部別山南尾根～八ッ峰～剣岳～馬場島。12月～78年１月松田研一、増田多喜男と親しらず～白馬岳～水晶小屋～槍ガ岳～槍沢。78年（夏）山崎とヒンズークシュ、ティリッチ・ミール山群に入りグルラシュトゾム（6,650m）登頂。1979年３月、寺本正史、駒宮博男と鹿島槍ガ岳天狗尾根～赤沢岳西尾根下降～大タテガビン第一尾根～八ッ峰～剣岳～北方稜線～僧ガ岳～宇奈月温泉。79年（夏）ＪＡＣ学生部のインド、カシミールのキシュトワール登山隊（伝田克彦隊長ら10名）に参加。シックル・ムーン（6,574m）とブラマーⅠ（6,416m）を目指した。竹中は９月30日に駒宮らと南東稜からの登頂に成功。ついでブラマーに転進しボニントンらが初登頂した南東稜から10月23日、竹中は鈴木章らと登頂した。80年春のＪＡＣチョモランマ登山隊の隊員選考から外れる。80年（夏）ＪＡＣ学生部隊として駒宮と二人でカラコルム、バトゥラⅠ峰（7,785m）を目指す。南面のムチチュール氷河から7,100mに達したが断念し駒宮が帰国。竹中は単独で再び7,500mに達したが登頂は断念した。エヴェレストの冬期登頂を目指した植村直己隊に参加して、80年11月28日ＢＣ入り。81年１月12日、Ｃ３（7,300m）からＢＣへ下降するため途中、何度か滑落し最後は7,100mで植村直己に見取られて死亡した。ＢＣから友に宛てた手紙には「来冬は単独でマカルーかチョー・オユーにトライしたい」と書かれていた。剣と黒部と鹿島槍を愛し、芭蕉に憧れ「天邪鬼」と自称した自然児だった。遺稿・追悼集に「風狂を尽くして」（1985年）がある。

**渡辺優（WATANABE Yu）**1949.11.10～1984.12.29

神奈川県横浜市生れ。武蔵工業大学時代に登山を始める。1972年横浜蝸牛山岳会入会。谷川岳、剣岳、穂高岳などで岩登りを続け、1977年（夏）日山協Ｋ２登山隊に参加、第四次アタック隊員として8,130mに到達。Ｋ２の帰途、寺西洋治とインド、ヒマチャル・プラデシュのムルキラ（6,517m）にピッケル無しのアルパイン・スタイルで10月10日登頂。78年（春）蝸牛山岳会のアラスカ、ハンター（4,443m）登山に参加、５月22日登頂に成功した。79年（夏）京都カラコルムクラブのカラコルム、ラトックⅠ（7,145m）の南壁登攀隊に参加。７月19日午後８時前、重廣恒夫、松見新衛と初登頂に成功。80年（夏）東京志岳会のカラコルム、ジュトマル・サール（7,330m）登山隊に参加。７月23日、北稜から杉本忠男、茂木正広と初登頂に成功。渡辺はこれでカラコルムで二つの処女峰をものにしたのであった。81年（春）ＨＡＪのカンチェンジュンガ（8,586m）とヤルン・カン（8,505m）の縦走を目指す登山隊に参加、主峰側の8,300mまで到達するも登頂はならなかった。82年（夏）蝸牛山岳会隊の隊長としてアラスカ、マッキンリー（6,194m）に挑戦し９日間で登頂した。83年12月～84年１月、東京志岳会隊で冬期アンナプルナⅠ（8,091m）に挑戦するが6,900mで断念した。85年にはガッシャーブルムⅠ（8,068m）とⅡ（8,035m）の連続登頂を目指し準備を進めていたが、正月合宿で北ア硫黄岳へ入山途上の84年12月29日、高瀬ダムにて転落死亡。遺稿・追悼集に「追悼」（昭和60年）がある。

**富田孝司（TOMITA Takashi）**

1939.2.1～1989.2.22

東京都北区生れ。66年紅稜クラブ入会。岩も尾根もこなすオールラウンドな登山を実践。紅稜クラブから東京都勤労者山岳連盟の運営に携わり六代目会長に就任。日本勤労者山岳連盟副会長、日山協海外常任委員を務めた。78年（春）労山とネパール警察が合同で初登頂したパビール（7,102m ガネッシュ・ヒマールⅣ）で副隊長として第一登頂者となった。1989年２月22日急性腎不全のため急死。気配りの良さから誰からも慕われた。遺稿・追悼集に「いつかある日」（1990年）がある。

# ロー・マンタンの空、遥かなり(13)

## カリガンダキ左岸の地図の空白部を行く

### ムスタン高原、タンゲ村

高橋　照

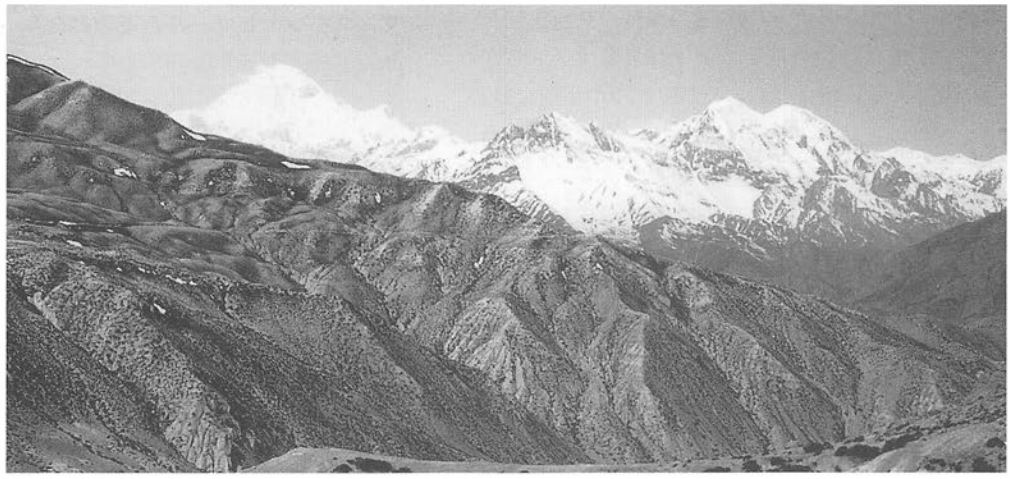
ツォーナムより一日がかりで辿って来たこの山稜は、たえずカリガンダキ対岸のムスタン街道と平行していた。ただ違うのは本道でなく間道なので、道巾はそれ程広くはない。ただ本街道の高度が3,000mより、3,500m台であるのに、この間道は3,800mより4,300m台の高度につけられている。そして、本街道では、一日に4、5ケ所以上は水場があるが、このルートでは皆無である。又、植物もカリガンダキ右岸の本街道には、イトスギやビャクシンその他闊葉樹樹林帯があり、谷川の流れも涸谷が少ない。それに反し、カリガンダキ左岸のこのルートは、植物といえばほとんどがカラガナばかりで、谷川も涸谷で余程大きな谷でないと水がない。正に天国と地獄の差である。

落伍したポカラ・ポーターは、女のポーターであった。暗くなったのでナイケが心配し助けに戻ったから良かったものの、この4,000m台の稜線で、着の身着のままで一人で露営していたら、おそらく凍死していたであろう。本街道を通さずに、こんな間道を通したからだと、リエゾンに対する怒りは、私達隊員だけでなく、ナイケやポーターの間にまで拡がっていた。面と向かって口には誰も出さないが、リエゾン自身も全体の空気を肌で感じ始め、徐々に身にしみて来たようであった。だから、彼の表情も、一日一日と苦悩がただよい始めてきたのを匿しようもなかった。

▲4300m峠から見るダム・カン（6,100m）

翌朝泊り場の真正面に見えるムスタン・ヒマールは、昨日の天候で、山の上は降雪があったとみえ、真白になり、雪線はかなり下まで下りていた。泊り場はちょっとした山合いの窪地なので、まだ太陽は当たらないが、ロー・マンタンやチャラン、それにガミーのオアシスが鮮やかなグリーンを展げていた。5年前私がロー・マンタンやガミーやチャランを訪れたときは、ピンク色のダッタン・ソバの花盛りで、桃色の絨毯を敷きつめたようであったが、今朝眺めるそれらの耕地はグリーン一色である。ケサン・ナムギャル氏の話だと、ムスタン地方全体に亘って、耕地の作づけは、小麦、大麦、ソバの三種類の穀物を転作しているそうである。ムスタン地方は寒冷地なので、当然転作は年に一度のサイクルで行っている。だから、今眺められる範囲では、一面にグリーンなので、大麦か小麦が作づけされていると思われた。八月の終りころこの地を訪れたとしたならば、耕地は見渡す限り黄金の波をうっていることであろう。

昨夜は隊員達とナイケで、つぎつぎと到着するポーターの荷物を積み上げ、真中を広くあけてその上にシートを被せ急造の家を造った。それでもこの高度では、流石のポーター達も寒かったのか、未だ暗い中より起き出し、カラガナの根っ子を燃やして暖をとり始めた。この附近のカラガナは直径5、6センチもある太い根をつけていた。日当たりの良いせいか風当たりが少ないのかで発育が良いのだろう。上部の斜面にはビャクシンの小木が散見出来た。あるいは、土中にほかの地域より



▶四三〇〇メートル峠からダウラギリⅠ峰（左）とドルポの山々

多く水を含んでいるのかも知れない。ポーター達は昨日にこりてか、朝飯の準備を始めていた。いつもは出発してから2、3時間後に食事をするのに……。

私達のキャラバンは少し遅れて8時半にポーター達を先頭に出発した。足下に見えるゴート（牧草地）よりは、おびただしい数の黒い山羊が列を作って、われ先にと斜面を私達の方に上がって来た。昨夕一塊りにしか見えなかった山羊が、こんなに沢山居るとは思わなかった。ゴートの真中に張った遊牧民の天幕よりは、ボテが二人私達の長い行列を見送っていた。

水平に走っている山腹道を2～30分も進んだと思われるころ、道は稜線づたいとなり、右からも大きな稜線が平行して現れて来た。そして、その稜線にも水平道が走っていて、その背後に雪山が聳え立っていた。この水平道はムクチナートよりの大トラバース道で、ナルシン・コーラを横断してくる難路である。背後の雪山はダム・カン（6,100m）のように思われた。ここから見るかぎり独立峰のように見え、スケールの大きい山のようだ。ダモダール・ヒマール（Damodal Himal）のダモダールのダム（Dam）は大きなという意味で、ウダール（Udar）は腹である。ヒンドゥの神のうちで腹のでかい神様はガーネシュ（Ganesh）しかないので、ダモダールとはガネーシュ神のことを指しているようだ。そうするとダム・カンは、大きな山ということになるのだろう。

100mほど前方に、小さな峠のような鞍部が現われ、数人のポーターがその上に休んでいた。ムクチナートよりの山稜はそこで合流していた。峠の先は切れていて、そこよりは急な斜面が下のヤク・コーラまで続いていた。ムクチナートから来た道も、この峠の上で合流していた。

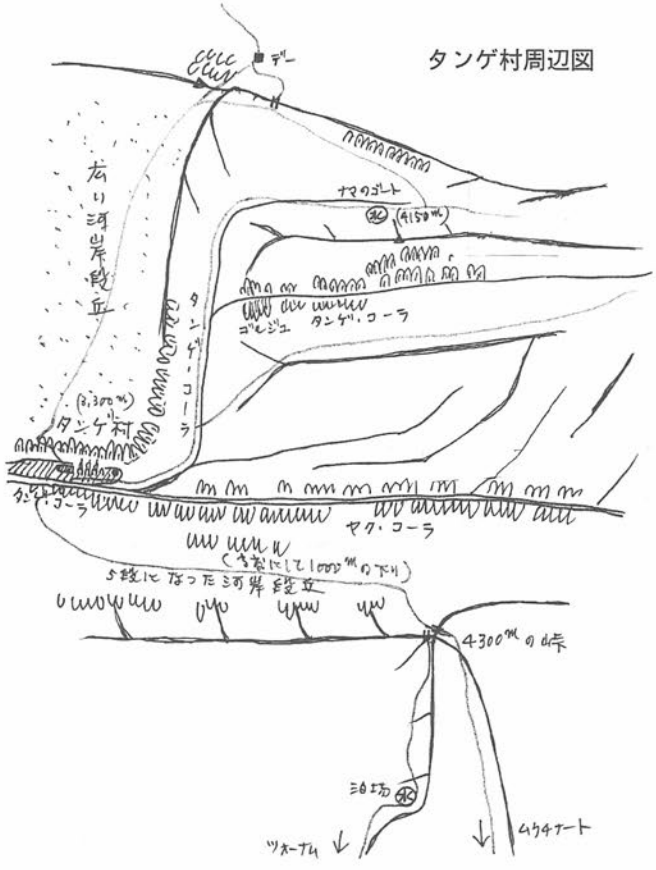
足下には広い長い河岸段丘が続き、その遥か底にはタンゲ村のオアシスが静かに寝っているように横たわっていた。峠の高度は4,300mであった。ポーター達は皆大喜びであった。露営地よりわずか30分も歩かない中に、目的地のタンゲ村の見えるところまで来たのである。昨日の難行苦行に比べると雲泥の差である。太陽もさわやかに降りそそぎ、大地も南斜面なので暖かかった。昨日落伍して命びろいをした女のポーターも、今朝はすっかり元気を取り戻したように見えた。ポーター達の間から唄声が聞こえだした。

タンゲ村は、想像もつかないタンゲ・コーラの広い河岸段丘の下に、緑のオアシスをたたえて、ひっそりと静まりかえって横たわっていた。

峠の上で一時間近くも休憩してしまった。本日の目的地であるタンゲ村が目の下にあるので急ぐ必要は全くない。日当たりのよい斜面で昼寝をするポーターも沢山いる。昨夜は充分寝られなかったからだろう。峠の下りは、最初は海底のせり上った粒子の細かい泥の斜面で、コンクリートのように堅かった。そして斜面が緩くなりはじめるあたりから、砂と礫の混じった河岸段丘に続いていた。巾の広い河岸段丘はタンゲ村の対岸まで、緩く長く5段になって続いていた。眼前は180度の展がりで、ムスタン・ヒマールの全貌と、ムスタン高原、チベットに続く低い山波の起伏が連なり、こ

の眺めこそがムスタンの全貌だった。ロー・マンタンの広大な緑の耕地と、チャランのオアシスが手に取るように望まれた。そして、その手前には、タンゲ村の上部のとてつもない広い河岸段丘の台地が広がっていた。整地さえしたら、ジャンボ・ジェット機も着陸出来そうだった。平らで長い長い河岸段丘を休むことなく下った。段丘の上は、まばらにカラガナが育成していた。3時間近くもこの長い大斜面を下ると、タンゲ村対岸の河岸段丘上に着く。高度差にして1,000m下ったわけである。タンゲ村の標高は3,300mだった。

私の目の高さにあるタンゲ村は、タンゲ・コーラの河岸段丘下の屏風のように立ち並ぶ岩壁の下にあった。細長く、しかもかなりの耕地面積を持っている村で、村の東部には立派な塔を形づくっているチョルテン（仏塔）が、無数に立ち並んでいた。これだけのチョルテン群はムスタン地区では全く珍しい。一体タンゲという村はどんな村なのだろうか。私は心がワクワクして来た。



タンゲ村周辺図

▼ムスタン・ヒマールと高原の全容

ヤク・コーラの河岸段丘に1ケ所崩れているところがある。下のヤク・コーラとタンゲ・コーラの合流点まで、そのガラガラのガレ場を10分程下ると河原に出た。もう、タンゲ村は頭上手の届くところまでせまって来た。合流点より下はタンゲ・コーラの河床になっていて、カリガンダキにそそいでいる。今は乾期なので河床づたいに行けば、チャランの集落もそんなに遠くはあるまい。半日もあれば充分だろう。ヤク・コーラの広い河床も、上流地帯は雪山なので、タンゲ・コーラよりは水量が多い。マナン地区のナウル・コーラの奥のサティ・コーラの源頭氷河地帯に、ダモダール・ヒマールとムクチナート・ヒマールの接続点がある。地図に記載されているムスタン・ラがその附近にあるようだ。マナン地区よりムスタン・ラを越える間道は、どうもこのヤク・コーラの源頭に通じているようだ。ヤク・コーラの北側の河岸段丘に見える踏み跡は、多分ナウルとタンゲを結ぶ間道だろう。

カムバ事件の時は、ンガイ・ウォンデイの軍隊は、この峠を越えてマナン・サイドに進出して、バーバ・イシの軍隊を殲滅したのではないかと考えられる。そして、そのことに関する情報が、これから約1ケ月に亘るブリクティ山群の踏破によって、段々とその信憑性が確実となって来たのである。翌日のことだが、村人から聞き出した情報によると、カムバ事件当時、機体を真白に塗った国籍不明の飛行機が何回となく飛来し、タンゲ村上部の広大な河岸段丘に多数の兵器を投下して行ったそうである。私がその当時、カトマンドゥで入手した情報はそれと全く同じであったが、唯、投

▶四三〇〇メートル峠からタンゲ村（左下）とムスタン高原をふかんする

下地点がジョムソム北方の高原台地という、ただ漠然としたことだけであって、タンゲ村の河岸段丘上と具体的な情報はつかめなかった。タンゲの村人の話によって、その信憑性と具体的事実がハッキリした訳である。タンゲ・コーラの上流地帯に、旧日本陸軍の独立歩兵大隊規模のカムバの兵舎（カムバ・ケーム）があるということもその時聞いた。私はカリガンダキ対岸（右岸）のサムマル附近で、チョム・ファツクという村を通過したことがあるが、その村もカムバの駐屯地だったということを聞いて知っている。土地の人はチョム・ファツク・カケバ・ケームと呼んで居り、十数軒の建物があり、その下方の斜面は一面のソバ畑で、その斜面の末端が、チュクサンのカリガンダキ右岸の河岸段丘上のゴムバのある崖まで続いていたことを思い出す。ケームとは英語のキャンプがなまった言葉だろう。だからカムバ・ケームは、カムバ・キャンプと置き換えてこれから考えて戴きたい。

タンゲ・コーラを上流に向かって、斜めに河原を行くと、途中数条の浅瀬があるだけで、難なく対岸につくことが出来た。馬を降りると、タシが「私が馬を引きましょう。」といって手綱を取って２メートル程の高さの土手の上まで引っ張り上げてくれた。土手よりは急な草の斜面が段丘上の麦畑に続いていた。草の斜面は、たった今若葉が出始めたという風情で、茎の短いタンポポ（日本タンポポと同種類）が、黄色い花をつけて、あちらこちらに咲き乱れ、土手のヘリにはずんぐりむっくりのドロ柳の大木が若葉をつけていた。

ふと気がつくと私の鼻をかすめた不思議な香りが、あたりに立ちこめている。一体何のにおいだろう。若芽の香りか、萌え出した草の香りかタンポポの香りか。どうもそうではないようである。或いは土のにおいかなとも思ったが、そうでもない。私は頭の中で、このにおいの正体を思い出そうとしたがどうしても思い出せなかった。ところが、その中にこのにおいは、カトマンドゥやシンガポールでもたしか……。いやいや、ビルマのラングーンや、タイのバンコクでもと走馬燈のように頭の中をぐるぐる回り出した。一体何のにおいだろう。どう思い出してもみても全く見当がつかなかった。その後、タンゲ村のこのにおいは、この上のナマのゴートでも、ナッカリ・ダモダール・クンダのベース・キャンプでもこのにおいに遭遇した。

後にカトマンドゥに戻って来て、植物学者のタマル・バッターチャル君に、ムスタン地域の植生について質問したことがあった。その際彼は、ム

◀タンゲ村の全容

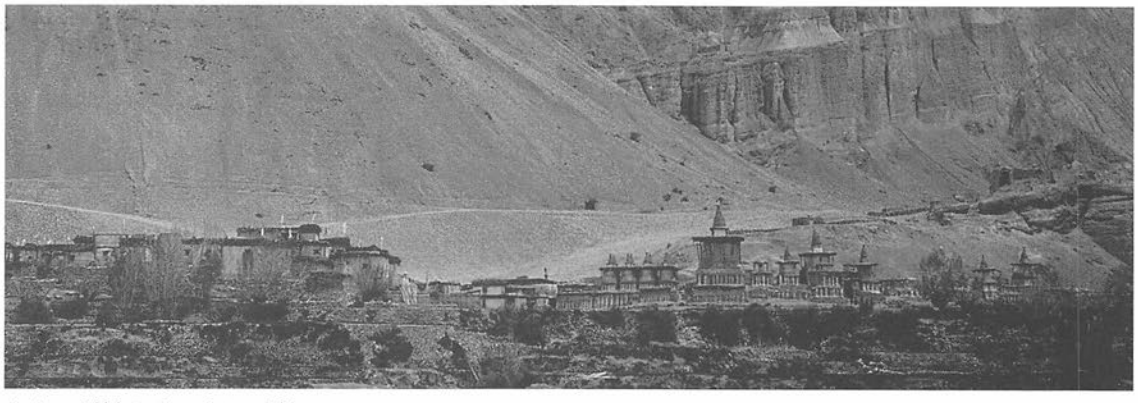
スタンの乾燥地帯の主な植物は、前にもたびたび出てくるカラガナ（Caragana）とエフェドラ（Ephedra）で、もう一つ香りの強いソフォラ（Sophora）という同じ豆科の植物であると教えられた。ソフォラの灌木はチベットでは仏教で使う線香の材料であるとも教えられた。ヒンドゥ教でも、この種類の材料から線香を作っているそうである。そうすると、私が東南アジア各地で出合ったにおいが、このソフォラから作られた線香の香りであった訳である。後にこの線香の話をタシにしたら、ナムチェ・バザールでも、このトゲのある灌木から線香を作るそうである。

土手の上に広がる畑地には、大麦が植えられ、20センチほどに育っていた。チョルテン群の横を流れる灌漑用水路からは、縦横に水路が麦畑に引かれ、その末端は滝になって再びタンゲ・コーラに落ちていた。

麦畑の畦を少し登ると、チョルテンの立ち並ぶ東の方に、ヤクのプール（囲い場）があって、遠征隊の天幕が張られていた。

私は泊り場にはリエゾンが当然頑張っていると思い、畦道を反対側にとって、タンゲの集落の方に急いだ。

タンゲ村は、日干しレンガで造られた2～3階建ての四つのブロックからなり、真中にはチョルテン群のところから来た通路が一本通っていて、それを突き抜けるとトンネルになっていて、裏側の広い麦畑に通じている。そして麦畑の中には、



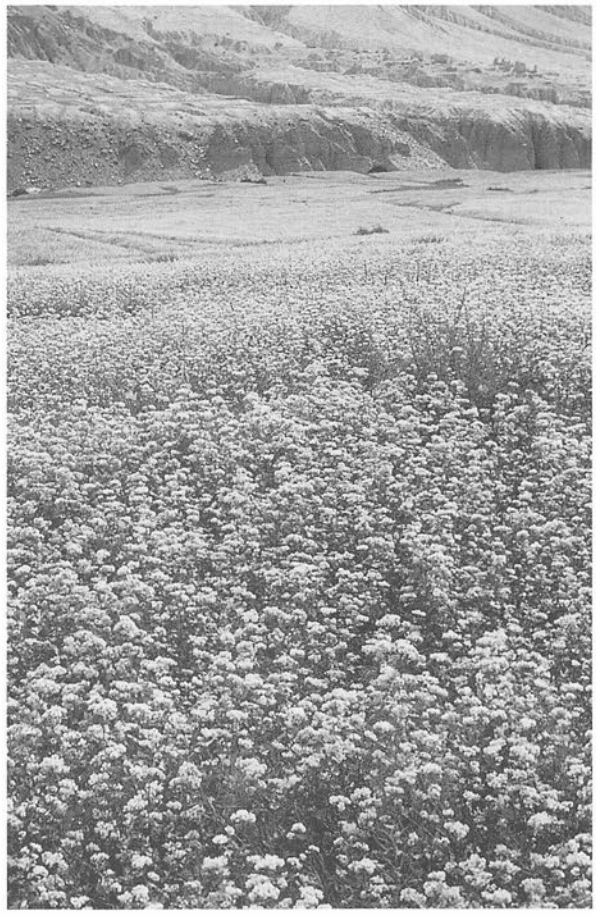
▲タンゲ村のチョルテン群

別のチョルテンが建っている。四つのブロックは細い路地が通っており、ブロックの中でまたいくつかの所帯に分けられている。人口は赤ん坊まで入れて、約百名だそうだ。各家の屋上には、薪にするカラガナの根っ子がうづ高く積み上げられていた。全くの貧乏村でこの村の周囲を取り巻く麦畑と、何頭かのヤクと、放牧に出している山羊だけが唯一の財産である。しかし、タンゲ村の耕地面積はかなり広く、百人の住民が食べることの出来るギリギリの穀物はとれるようだ。住民は全部ロー・パ（ムスタン人）で、村の入り口にある小さなバッティに、灌漑用水のダム工事のネパール人の若い技師と、小学校のネパール人先生二人が住んでいる。ダム工事の仕事をする時には、小学生は全員休校で、このネパール人の先生に引率されて工事現場に向い、子供達も手伝うそうである。小学校の建物は私達のキャンプ地より、少し寄りに、日干しレンガの窓のない建物があるが、それが小学校なのである。

まだ正午を過ぎていくらも経っていないので、私は精力的に集落の周囲を撮影し、それよりチョルテンの調査に向った。

私はリエゾンのまだ目の届かない中に、色々なものの撮影をする必要があったのである。

▼ガミーのダッタン・ソバの花



## イエティ捜索隊がダウラギリ山群へ

### ――― 雪面に足跡を残す未知の動物がいる！ ―――

ヒマラヤ地方に根強く残る「イエティ伝説」を解明すべく、高橋好輝氏が率いる捜索隊がネパールに出発した。

9年前、高橋が率いる捜索隊はダウラギリ山群において精力的に捜索と調査を実施し、その実像の撮影こそ叶わなかったもののイエティの存在を確信した。その模様はＴＶで紹介された。

今回の捜索の舞台も前回と同じで、さらに絞り込んだ場所を重点的に捜索・調査する。

［日程の概要］

8月10日　日本出発
14日　カトマンズ～ベニ
15日　キャラバン開始
21日　ＢＣ建設　捜索・調査
10月5日　18日　本隊帰国

［捜索隊の構成］

隊　長：高橋好輝(60)75年ダウラギリⅣ登頂
副隊長：八木原圀明(56)85年エヴェレスト登頂
隊　員：飛田和夫(57)81年ヤルン・カン登頂
〃　村上和也(48)83年冬期エヴェレスト登頂
〃　古山伸子(46)在カトマンズ
〃　佐藤修史(35)93年トムール
〃　志村真由美(31)03年マッキンリー登頂

［その他］

協　賛：サントリー
後　援：朝日新聞社
協　力：日本ヒマラヤ協会／ニコン／ヒマラヤ観光開発／トランス・ヒマラヤ・ツアー／ホテル・ヒマラヤ／ウエック・トレック

# 地域ニュース

## 《パキスタン》

### キンヤン・キッシュ隊断念

同人パハールがキンヤン・キッシュ（7,852m）に派遣した登山隊（飛田和夫隊長以下６名）は、西稜上6,000mに到達したものの登頂を断念して下山した。同隊によれば、カラコルム・ハイウェイは雨と余震の影響で週のうち１～２回閉鎖され、開通しても崩れた土砂でスピードを出せないとの事。なお、同峰の東峰（7,400m）を目指していた韓国隊も悪天候などで登頂を断念した。

### ＧⅠ（8,068m）で遭難相次ぐ

合同でガッシャーブルムⅠに挑戦していた、スペインのホセ・マニュエルとアルゼンチン女性のナシ・ノエミの二人が７月６日、7,000m付近で行方不明となった。また同峰に挑戦中のウクライナ隊（ベレンチン・シモネンコ隊長ら８名）は登頂を断念したが、Ｃ１からＣ２へ向かっていたペスティンコとコバロフが突然の落石に襲われ、ペスティンコが死亡した。

# Ｂｏｏｋｓ

### エベレストから百名山へ
### ヒマラヤから教わったこと－重廣恒夫著－

岩登りに夢中になっていた頃、憧れていたルートの一つに甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁があった。勿論下から遡行して奥壁を登るのである。著者の重廣は1970年暮れに今は亡き長谷川恒男の誘いであっさりとその登攀に成功した。重廣のヒマラヤ・デビューは、1973年ＲＣＣⅡエヴェレスト南西壁であった。76年ＪＡＣナンダ・デヴィ、77年日山協Ｋ２で第二登。79年京都ラトックⅠ初登頂。80年ＪＡＣチョモランマ北西壁下部初登攀。84年ＪＡＣカンチェンジュンガ南峰～中央峰縦走。85年関西マッシャーブルム北西壁初登攀～ブロード・ピーク登頂。88年ＪＡＣ三国チョモランマ。91～92ＪＡＣナムチャバルワ。95年ＪＡＣマカルー東稜。日本のアルピニズムがヒマラヤで花開いた時期、常に先頭に立っていた。ＨＡＪを除く国内の様々な母体の登山に参加できたのは、一重にその性格故であろう。その期間71年に得た職業を止めずにいられたことがそれを証明している。いずれにしてもこれだけ母体の違う集団で登山した中から得たことは、語って余りあるものであっただろう。後年ＪＡＣに偏ったことはちょっと残念ではあった。（山森）

新書判　318頁　光文社　2003年６月20日刊
820円＋税

### ダワ・カンリ登頂報告

東京理科大学Ⅱ部山岳部ＯＢ会が、2000年夏、インド・ヒマラヤ、スピティにある6,140mの未踏峰に派遣した登山隊の報告書。ＯＢとはいえ、70歳台１名、60歳台５名、50歳台５名、30歳台２名。誰もが夢見る「同じ釜の飯を喰った仲間」とのＥＸＰが、事故もなく登頂に成功して終えることがどうしてできたのか。本書にはくまなく網羅されている。それにしても、この人数でアナカン（別送品）無しのＥＸＰができるほど、インドは物が豊富になったのであろう。（山森）

Ｂ５判　72頁　〒279-0031　千葉県浦安市舞浜２－４－11　加藤孝子方

### Kalasha －Their life＆Tradition－
### カラーシャ　－その生活と伝統－
### わだ　晶子（Akiko WADA）著

今年５月、思いがけず懐かしい人から連絡を戴き、HAJルームで盃を傾けつつ、旧交を暖めた。パキスタン、カラーシャの谷に住む、わだ晶子さんである。わださんと日本でお会いすることは滅多に無く、たいがい山の行き帰りにイスラマバードで会ったり、冬のイスラマバードで督永さんの所に居候している所にひょっこり現れたり、昨年夏には、多くの日本人がパキスタンから外務省のお達しで帰国する中、成田からパキスタン航空イ

スラマバード行きに乗り込もうとした数人の日本人の中に私とわださんはいた。わたしは登山に、彼女は家へ帰る為に。そう、彼女は、10年程前にカラーシャの男性と結婚してパキスタン在住なのである。初めて訪れてから16年、数年前に本も出版している（「パキスタンに嫁にいく」三一書房）が、写真集は初めてである。パキスタンで印刷、出版されているので、勿論英文であるが、日本で販売されるものにはわださん自身による和文の小冊子が付いているので心配はない。普通このような写真集の場合、写真の説明というと、ありきたりのものになってしまう事が多いが、そうはなっていない。彼女は第三者としてそこに居るのではなく、同じそこに暮らす住人として村の生活の写真を撮り、その説明文を書いている。わざわざ人に聞いて書く必要はなく、切り取った風景をただ当たり前にどういう場面であるか書くだけでよいのだ。

自分自身、ヒマラヤの麓の村に何回も通い、子供達の成長していく姿や村々の四季を撮ったことがあるが、とてもこのようなキャプションを入れることは出来ないと思う。

ヒマラヤの麓に住む人々に興味のある人は是非一読をお勧めしたい。

何故なら、村を訪れても、通り過ぎてしまう旅人がほとんどである昨今、それではあまりにも見える物が少ないという事、長く居れば居る程、勿論しがらみもいっぱい出てくるが、良い物、ホッとするような風景に出会うことが出来るという事を教えてくれるからである。

我々には出来ない生活をわださんはしていて、この写真集で少しだけ見せてくれるのである。

最後に一つだけ個人的に不満に思うのは、この本のコンセプトからして仕方ないのかも知れないが、説明的な写真が多い気がする。思わずドキッとするような表情のある絵もあるが、少な過ぎるように思う。

普段はみんなにこんなにすましていませんよね、わださん！　（記：岩崎　洋）

変形Ａ４版　ハードカバー　136p　カラー
2003年発行
送料込み　4,800円
申し込みは、郵便振替にて、
口座記号番号　00130-1-388365
加入者名　和田晶子・写真集「カラーシャ」出版後援会　まで、住所・氏名記入の上、送金して下さい。入金確認後、発送致します。

問い合わせ先　鈴木いさ子　Tel＆Fax：0423-25-5672。在庫がない場合は、パキスタンから取り寄せるので、時間がかかる場合があります。

前記の本、「パキスタンに嫁に行く」に興味のある方は、直接わださんに問い合せて下さい。

Akiko Wada
c/o Mountain Inn
P. O. Box 7 ,N.W.F. P, Pakistan,
Fax：+92-933-412668

## ヒマラヤから

### キンヤン・キッシュ便り

はいけい。ようやくきびしい下部岩壁を抜け、Ｃ１（5,300m）が完成。現在、飛田隊が絵ハガキの左端岩峰のルート工作中。様子はＢＣ（4,100m）から真正面に眺められます。（絵ハガキの）３番目の峰が目的の西峰（7,300m）、右奥が主峰です。全員元気。ＢＣにゆたかなネギ畑があり、生ねぎをかしせりながら日々の生気をやしなっております。

2003.6.24 ヒスパー ブルランＢＣ　田村正勝

■財政支援〔５万円〕岩崎　洋、中川　裕

### 東京集会のお知らせ

日時　８月25日（月）午後７時～
内容　キンヤン・キッシュ報告
場所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）
又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

# 新疆ウイグル自治区登山の和文参考資料

## （1979年開放以後のもの）

**1）チョゴリ（Qogir）8,611m**

1．喬戈里　登頂記（中国側北稜ルート征服の全記録）日本山岳協会／NHK取材班　日本放送出版協会　昭和57年12月20日　1,600円
2．挑戦の記録・チョゴリへの道（世界第二峰に中国側から無酸素で初登頂）朝日新聞社　昭和57年12月20日　1,500円
3．チョギル峰・カラコルム主峰（尚子平）「月刊人民中国」1983年3月号
4．喬戈里峯（K２）偵察行（原田達也)「山岳第77年」日本山岳会 1982年12月１日 3,500円
5．喬戈里峯（K２北面・地図の空白部を探る）原田達也「岳人415号」1982年１月号
6．K２北稜偵察記（坂下直枝)「岩と雪86号」
7．遥かなる喬戈里の頂に「日本山岳協会喬戈里峯（K２）偵察隊」（小西政継)「山と渓谷536号」1982年１月号
8．喬戈里峯（K２）登山の展望（小西政継登攀隊長らに聞く）編集部「岳人415号」1982年１月号
9．悔いなき登山の展開を（喬戈里峯の未踏の北稜登攀をめざして）新貝勲「岳人418号」1982年４月号
10．山は晴天（小西政継）中央公論社　昭和57年４月10日　1,300円
11．登頂手記：「チョゴリへの長い道」（吉野寛）「山と渓谷550号」1982年11月号
12．チョゴリ（K２）北稜無酸素初登攀成る（川村晴一)「山と渓谷550号」1982年11月号
13．チョゴリ峰登山の光と影（登頂隊員に聞く）編集部「岳人425号」1982年11月号
14．チョゴリ峰遠征をめぐって（水野勉)「ヒマラヤ132号」1982年11月号
15．タクラマカンの彼方・チョゴリへの旅（佐々木慶正)「ヒマラヤ131号」1982年10月号
16．砂漠と氷雪の彼方に（チョゴリ登頂の全記録）小西政継　山と渓谷社　1983年9月1日　1,200円
17．果てしなき山行（尾崎隆）中央公論社　昭和58年7月20日　1,200円
18．喬戈里峯北稜（高見和成)「山岳第78年」日本山岳会　1983年12月1日　3,500円
19．日山協、とんだ遭難さわぎ（佐瀬稔)「岳人446号」1984年8月号
20．日山協チョゴリ峰登山隊の不祥事を越えて（小西政継)「山と渓谷579号」1984年10月号
21．食い物にされた登山隊(編集部)「岩と雪104号」
22．稜線・追悼吉野寛（吉野あつ子）1985年10月
23．天の匂い・柳沢幸弘遺稿集（登攀クラブ蒼氷／早大岳友会）1984年8月
24．喬戈里峰（K２）登頂（今村裕隆)「ヒマラヤ229号」1990年12月号
25．喬戈峰北西面の登攀（岸本五三男)「山岳第86年」日本山岳会　1991年12月7日　3,500円
26．チョゴリ峰登頂（横浜市日中友好喬戈里峰登山隊)「岳人522号」1990年12月号
27．聖域の巨峰－喬戈里峰北西壁初登攀の記録－横浜市日中友好喬戈里峰登山隊実行委員会　平成３年８月１日

**2）シャクスガム河上流域**

1．最後の地図の空白部（福島正明)「山と渓谷650号」1989年9月号
2．G1東稜に新ルート（横浜山岳協会ガッシャーブルムⅠ峰登山隊)「岳人507号」1989年9月号
3．シャクスガムの遥かなる峰（宮城県山岳連盟）1990年1月20日
4．BROAD PEAK未踏の稜から中央峰登頂（オスカル・カディアチ)「岩と雪161号」1993年12月
5．シャクスガム渓谷に輝く峰々　中国側からのガッシャーブルムⅡ峰偵察（奥原宰)「岳人616号」1998年10月号

6. 遠き山　加舒尔布魯木Ⅱ峰（立教大学ガッシャブルムⅡ峰登山隊）2000年3月31日
7. シャクスガム河の氷塊跡（西川益生・古市進）「山672号」日本山岳会　2000年5月20日
8. 立教大学ガッシャブルムⅡ峰登山隊の報告（鯵坂青青)「山岳第95年」日本山岳会　2000年12月2日　3,500円

**3）クラウン（The Crown）7,295m＆チリン（Chiring）7,035m**

1. 未踏の山・辺境の山　第4回：クラウン（カラコルム）藤大路美輿「岳人407号」1981年5月号
2. 皇冠峰の頂をめざして「ヒマラヤ164号」1985年7月号
3. 砂漠の果ての遥かな頂「ヒマラヤ171号」1986年2月号
4. クラウン（舘野秀夫)「岳人463号」1986年1月号
5. 砂漠の涯の遠き頂き（日本ヒマラヤ協会）1987年3月
6. 中国・皇冠峰登山を顧みて（山本良三)「山岳第83年」日本山岳会　1988年12月　3,500円
7. 世界第3位の未踏峰堕ちず（岡本良治)「山と渓谷630号」1988年1月号
8. 皇冠峰の頂目指して「ヒマラヤ225号」1990年8月号
9. クラウン峰隊事故報告「ヒマラヤ229号」1990年12月号
10. 皇冠峰の堅塁なお高く「ヒマラヤ230号」1991年1月号
11. クラウン峰BC踏査報告（山形正己)「ヒマラヤ241号」1991年12月号
12. 三度シャクスガムを越えて－皇冠峰登山計画－「ヒマラヤ248号」1992年7月号
13. クラウン峰事故報告「ヒマラヤ254号」1993年1月号
14. 皇冠の頂なお遠く「ヒマラヤ255号」1993年2月号
15. 永別　皇冠峰　1992年クラウン峰挑戦の記録　日本ヒマラヤ協会　1994年5月
16. 世界第2の未踏峰クラウンに全員登頂（日中友好皇冠峰登山隊「岳人557号」1993年11月号
17. 皇冠の冠に立つクラウン峰初登頂の記録（徳島和男)「山岳第89年」日本山岳会　1994年12月3日　3,500円
18. The Crown　日本山岳会東海支部　1994年3月
19. 竜王－中国領カラコルムへの挑戦（ハッグ・マクマナーズ／菅原愛里訳)「ヒマラヤ334号」1999年9月号
20. 竜王－中国領カラコルムへの挑戦Ⅱ（ハッグ・マクナーズ／菅原愛里訳)「ヒマラヤ336号」1999年11月号
21. 麒麟峰　花園にそびえる7,000mの未踏峰に全員登頂(岐阜大学)「岳人569号」1994年11月号
22. 麒麟峰初登頂　岐阜大学　1995年7月

**4）コングール（Kongur）7,719m＆コングール・チュビエ（Kongur Tiubie）7,595m＆チャクラギール（Chakragil）6,727m他**

1. 日本コングール登山隊1980（先遣隊報告書）京都カラコルムクラブ
2. 登山・それは愛（塚本珪一）東京新聞出版局　1981年4月15日　1,200円
3. コングール7,719mの光と影（池田常道)「岩と雪85号」
4. コングール峰初登頂（'81・7　アルパインスタイルによる英国隊の成果）編集部「岳人412号」1981年10月号
5. コングール峰北稜での“死”（寺西洋治・鴨満則・松見新衛）塚本珪一「岳人413号」1981年11月号
6. コングール私記(アラン・ラウス)「岩と雪89号」
7. コングール峰・巨大な屏風（劉大義)「月刊人民中国」1982年12月号
8. ザイルの二人（満則・秋子の青春登攀記）山と渓谷社　1983年1月10日　980円
9. コングール主峰北稜を全員で初登攀（京都カラコルムクラブ日本コングール登山隊)「岳人508号」1989年10月号
10. コングール　－1980・1981・1989（日本コングール登山隊「山岳第84年」日本山岳会　1989年12月　3,500円
11. かがやく峰　Kongur　1989年日本コングール登山隊報告書　京都カラコルムクラブ

1994年5月
12. コングール・チュビエ峰登頂（木村清順）「山岳第77年」日本山岳会　1982年12月1日
13. コングール・チュビェ峰・キルギスの白い帽子（袁揚)「月刊　人民中国」1983年2月号
14. 中国西域コングール・チュビエ峰－1989年登山隊報告書（宮崎県山岳連盟中国西域登山隊）1990年5月
15. 遠かった頂上　コングールチュビエ峰南稜への挑戦（栃木県高体連登山部中国コングール学術登山隊）2001年11月10日
16. 幸運な転進、初登頂のチャクラギール（明学山岳会中国・チャクラギール登山隊)「山と渓谷642号」1989年1月号
17. 秘境・チャクラギールの北面に入る（伊藤敞)「山585号」1994年2月号
18. Kobold コクセル峰初登頂特集　山形大学コーボルト会　1993年

**5）ムスターグ・アタ（Muutagata）7,546m**

1. シルクロードの白き神へ　スピダーニェ同人
2. シルクロードの白き神へ（ムスターグ・アタの登頂81・8）崑崙登攀川崎市教育隊「岳人413号」1981年11月号
3. ムスターグ・アタ北峰（坂原忠清)「山岳第77年」日本山岳会　1982年12月1日　3,500円
4. ムスターグ・アタ峰：氷山の父（陳栄昌)「月刊人民中国」1982年9月号
5. アメリカ隊と挑んだ7,000m峰山スキー遠征記(笹山博夫)「山と渓谷601号」1986年2月号
6. 中国北部「氷山の父」ムスターグ・アタ登頂と頂上からのスキー滑降（牧野総治郎)「山と渓谷625号」1987年8月号
7. 微笑んだ中央アジアの双頭の峰ムスターグ・アタ(尾崎啓一)「山と渓谷628号」1987年11月
8. ムスターグ・アタ医学学術登山隊「ヒマラヤ学誌第1号」京都大学ヒマラヤ研究会1990年3月10日　1,500円
9. 絲綢之路の白き峰－ムスターグ・アタ－　鶴岡ヒマラヤ研究会　1991年12月1日
10. ムスターグ・アタ登山（相馬勉)「山558号」1991. 11. 20
11. 北へ北へ頂へ－夢馳せた追憶の日々－（三原洋子)「ヒマラヤ225号」1990年8月号
12. 第二次海外登山　日本山岳会慕士塔格山登山隊'91報告書（同）1992年7月
13. 慕士塔格山（ムスターグ・アタ）登山の記録（相原勉)「山岳第87年」日本山岳会　1992年12月5日　3,500円
14. 氷山の父に挑む（HAJムスターグ・アタ登山隊1992年)「ヒマラヤ257号」1992年4月号
15. ムスターグ・アタ登山計画「ヒマラヤ260号」1993年7月号
16. ムスターグ・アタ全員登頂「ヒマラヤ266号」1994年1月号
17. ムスターグ・アタ登山計画「ヒマラヤ273号」1994年8月号
18. ムスターグ・アタ全員登頂「ヒマラヤ278号」1995年1月号
19. 葱峰の白き父なる山　日本ヒマラヤ協会　1995年4月
20. ムスターグ・アタ山群の未踏峰全員登頂に成功(青年部・学生部)「山606号」1995年11月号
21. ムスターグ・アタ山群未踏峰の登頂（絹川祥史)「山岳第91年」日本山岳会　1996年12月7日　3,500円
22. ムスターグ・アタ登山計画「ヒマラヤ297号」1996年8月号
23. ムスターグ・アタ登頂「ヒマラヤ301号」1996年12月号
24. パミールの名峰　氷山の父に登る「ヒマラヤ313号」1997年12月号
25. 新疆の太陽と風と山　ムスターグ・アタ峰学術登山仮報告書　芝浦工業大学　平成9年10月
26. 新疆の太陽と風と山　芝浦工業大学山岳部・OB会　1998年3月
27. シルクロードの白い峰　スキーDEサミット隊1997　1998年3月
28. ムスターグ・アタ峰登頂から（堀田暁彦)「山641号」1998年10月号
29. 遥かなるムスターグ・アタ　栃木県山岳連盟　1999年4月
30. ムスターグ・アタ（リコー山の会慕士塔格登山隊　1999年10月
31. 冒険装備開発日誌（九里徳泰）7,500m峰で

エクスペディション・テスト「山と渓谷782号」2000年9月号、標高7,000mで緊急ビバーク！「山と渓谷783号」2000年10月号
32. シニアふたりでムスターグ・アタ登頂（南井英弘)「山690号」日本山岳会　2002年11月
33. ムスターグ・アタ最近の現地情勢（南井英弘)「ヒマラヤ373号」2002年12月号

**6）崑崙周辺**

1. ウルグ・ムズターグの謎と正体（水野勉)「岳人444号」1984年6月号
2. 西域秘話（上・下）測量士ジョンソンの生涯「ヒマラヤの三角測量」（金子民雄)「岳人444＆445号」1984年6＆7月号
3. 万山の祖、崑崙の頂へ「ヒマラヤ165号」1985年8月号
4. 遥かなる崑崙の頂「ヒマラヤ169号」1985年12月号
5. 崑崙に咲いた日中友好の花（日中婦人友好登山隊)「岳人461号」1985年11月号
6. 開かれた万山の祖「崑崙山脈」（森美枝子／釣部恵子)「山と渓谷598号」1985年12月号
7. 地球の背骨の一角に立つ（日本ヒマラヤ協会日中婦人友好登山隊）1986年5月
8. ウルグ・ムズターグ初登頂－1985年秋－（周正、尾形好雄：訳)「ヒマラヤ177号」1986年8月号
9. 幻の中央アジアの最高峰（早坂敬二郎)「山と渓谷615号」1986年12月号
10. 東京農大崑崙7,167メートル峰（早坂敬二郎)「山岳第82年」日本山岳会　1987年12月
11. 崑崙山脈7,167m峰登山隊86（東京農業大学山岳部）1988年1月
12. 秘境・崑崙を行く(大場秀章)岩波書店　1989年6月20日　490円
13. 崑崙山脈の範囲は、どこからどこまでか（譚佐強)「ヒマラヤ180号」1986年11月号
14. 崑崙の秘境探検記（周正／田村達弥訳）中央公論社　1986年11月号　500円
15. 中国崑崙山脈　無名峰6,699mの探査・5,740m峰の初登頂（諸岡久四郎）福岡山の会　1989年11月
16. 慕士山（ムズターグ）初登頂（栃木県高体連登山部中国崑崙登山隊）1990年9月
17. 慕士山（ムズターグ峰）初登頂（同上)「岳人523号」1991年1月号
18. CHQLPANLIK MUZTAGH 6524　崑崙登山隊報告書(仙台－高山の会崑崙登山隊)1990年7月
19. ギシリク・タ－ク初登頂　山形県山岳連盟
20. ハーン・ヤイリク峰偵察1995報告書　板橋勤労者山岳会　1995年11月
21. 砂塵の彼方へ　崑崙山脈ハーン・ヤイリク峰6,744m初登頂の記録　JWAF崑崙登山隊　1997年5月
22. 町の山岳会の崑崙登山　夢を現実にさせる努力を（江口充章）岳人607号　1998年1月号
23. 崑崙山脈7,167m峰登山隊報告書　西陣山岳会　1998年3月
24. GPSでたどるタクラマカン砂漠と崑崙の山旅（西山邦夫)「岳602号」1997年8月号
25. ヘディンがたどった崑崙の道（松本徑夫)「岳人573号」1995年3月号
26. 喀什塔什主峰偵察隊報告書（信濃高等学校教職員山岳会）1999年10月5日
27. 102年ぶりにとらえた西部崑崙の幻の山（木野広明)「山と渓谷773号」1999年12月号
28. ついに全貌をとらえたチョンムスターグ（児玉茂)「山と渓谷775号」2000年2月号
29. 幻の山・チョンムスターグ登頂記（大谷映芳)「山666号」2000年11月20日
30. チョンムスターグ(6,962m)(稲門山岳会)　2000年11月11日
31. 西部崑崙の秘峰　幻の山チョンムスターグ初登頂（山田新)「岳人641号」2000年11月号
32. チョンムスターグの偵察－西部クンルンの未知の領域を訪ねて（児玉茂)「山岳第95年」日本山岳会　2000年12月2日　3,500円
33. 夢　はばたけ　未踏峰カシタシめざして（信濃高等学校教職員山岳会）2001年1月25日
34. チョンムスターグ初登頂（山田新)「山岳第96年」日本山岳会　2001年12月1日　3,500円
35. より高く、より遠く、未知を求めて　2000年KOR65登山報告書（北の山会崑崙隊）　2001年9月15日

36. より高く、より遠く、未知を求めて－中国崑崙山脈未踏峰登頂報告（中村淳)「山岳第96年」日本山岳会　2001年12月１日　3,500円
37. セリッククラムムスターグ初登頂（大西浩）「岳人653号」2001年11月号

**7）トムール（Tomur）7,435m周辺**

1. トムール峰は遠かった（トムール峰日本女子登山隊)「岳人473号」1986年11月号
2. 九死に一生を得た10人の女たち（田部井淳子）「岳人473号」1986年11月号
3. 天山山脈　托木尔峰（女子登攀クラブ）1986年12月
4. 再び天山の雪蓮を目指して（日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊)「ヒマラヤ205号」1988年12月
5. 砂嵐の山旅（天山山脈雪連峰登山隊)「岳人477号」1987年３月号
6. 執念の初登頂－天山山脈雪蓮南峰－（89日中友好天山シルクロード学術調査登山隊)「岳人509号」1989年11月号
7. EXPEDITION Ⅲ（横浜市立大学探検部）1990年11月
8. 天山の秘峰　雪蓮峰陥落（徳島和男)「ヒマラヤ229号」1990年12月号
9. 未踏の天山・雪蓮に立つ（徳島和男)「山岳第86年」日本山岳会　1991年12月　3,500円
10. 雪蓮峰初登頂（日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊)「岳人522号」1990年12月号
11. 雪蓮峰　日中友好天山山脈雪連峰登山隊1988年　日本山岳会東海支部　1989年３月
12. 雪蓮峰　6,627m　日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊1990　日本山岳会東海支部　1991年３月
13. '90・天山山脈トムール峰登山隊報告書（横浜市立大学天山踏査の会）1991年５月
14. '92・天山山脈トムール峰登山隊報告書　天山登攀倶楽部　1993年３月
15. '94・天山山脈トムール峰登山隊報告書　天山登攀倶楽部　1996年５月
16. はるかなる「雪の眉」をめざして天山山脈カシカール峰初登頂（守尾益男）登山時報No.248～251号　1995年10月号～96年１月号
17. 天山山脈　科其咯尔峰初登頂の記　J.W.A.F瀬戸内天山カシカール峰登山隊
18. 乾いた山と中国の朋友(宮武よし子)1996年７月
19. グルグルムスターグ初登頂（大石惇)「山岳第93年」日本山岳会　1998年12月５日　3,500円
20. 新疆巴音布魯克草原と中部天山山麓の旅（川上隆)「山631号」1997年12月号

**8）ボゴダ（Bogoda）5,445m**

1. 中国・天山山脈処女峰　ボゴダ　京都山岳会1981年12月１日
2. 天山山脈　博格達峰（国鉄岳連中国親善登山報告）国鉄山岳連盟　昭和57年４月20日
3. 日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊1981年の報告　日本山岳学生部ボゴダ登山隊
4. 天山の詩（ボゴダⅢ峰初登頂報告書）天山会登山隊・トレッキング隊
5. 天山への夢遥か（中国遠征特集号）もんたにゅう会
6. 日本山岳会学生部ボゴダ山登山隊1982年の報告　日本山岳会学生部ボゴダ登山隊
7. ボゴダ峰・天池を抱く山（王振華)「月刊人民中国」1982年８月号
8. ボゴダ山群1981年（鹿野勝彦)「山岳第77年」日本山岳会　1982年12月1日　3,500円
9. 天山山脈ボゴダ峰（5,445m）周辺の自然について(２,３のメモ)名越昭男「山岳第77年」
10. 地名と地図と標高について（折込地図解説）児玉茂「山岳第77年」
11. ボゴダ山群の鳥（その鳥相についての案内）児玉茂「山岳第77年」
12. ボゴダ主峰初登頂（1981年５～６月の記録）京都山岳会ボゴダ登山隊「岳人411号」1981年９月号
13. 京都山岳会ボゴダ峰登山隊の記録（梶原達男）
14. ボゴダⅢ峰の初登頂（81・８日本天山会登山隊による全員登頂）編集部「岳人412号」1981年10月号
15. ボゴダ山群ひとめぐり・JAC学生部登山隊（増島達夫)「山と渓谷538号」1982年３月号
16. 高校生の海外遠征（座談会：ボゴダ峰とツインズ峰登山)「岳人425号」1982年11月号
17. 熱意あふれる技術研修（ボゴダ山麓の日中登山研修に参加して）中村正勝「岳人426号」1982年12月号

18. ボゴダをめざして　動霧山岳会　昭和58年5月1日
19. 登山と自然観察（川澄隆明)「岳人433&434号」1983年7&8月号
20. ボゴダ山群の植生について（奥田尚志)「山岳第78年」日本山岳会　1983年12月1日　3,500円
21. ボゴダⅡ峰の南面の地学的知見（川澄隆明)「山岳第78年」
22. ボゴダ西峰と中央峰を踏破（JAC学生部)「岳人452号」1985年2月号
23. 天馬の里（鈴木／大野紀和)「岳人452号」
24. 天山博格達Ⅵ峰登山報告書（仙台－高山の会天山登山隊）1985年1月
25. 天山への路（福島天山友好登山訪中団）1985年11月
26. 日本山岳会学生部ボゴタ峰登山隊1984年（大野紀和)「山岳第80年」日本山岳会　1985年12月　3,500円
27. '86博格達登山報告書（福島教育大学山岳会）1987年3月
28. ボゴダ峰（5,445m）登山報告書栃木県山岳連盟　1995年12月
29. 遥かなる天山山脈ボゴダ峰「ツイハオ」トレッキング（藤田健次郎)「山と渓谷784号」2000年11月号

**9）その他**

1. 中国・新疆北部の旅　ハラス氷河は遠かった（奈良原町子)「山630号」1997年11月号
2. アルタイ登山計画「ヒマラヤ333号」1999年8月号
3. 絲綢之路の未踏峰（川上隆)「山627号」1997年8月号
4. 新疆・ウイグルの印象（チョゴリ峰登山隊顧問団訪中に参加して）広島三朗「岳人422号」1982年8月号
5. 夢街道「天山南路」東西文明の交路、烏魯木斉から喀什まで（田島正)「山と渓谷564号」1985年9月号
6. ウルムチからクンジェラーブ峠を越えてフンザへ（佐俣敏郎)「山と渓谷617号」1987年1月
7. 天山越えの古代シルクロード氷河古未道とムザルト峠（奥野三郎)「山と渓谷619号」1987年3月号
8. シルクロードの幻の山（金子民雄)「岳人483～484号」1987年9～10月号
9. 天山北路シルクロードの旅（尾形好雄)「ヒマラヤ205～207、209号」1988年12月～
10. 玄奘の天山を行く（小川務)「岳人510～512」1989年12月～
11. 青春アドベンチャー行～篠崎純一さん、7ヶ月でアジアの12座をいっきに登頂（雪蓮峰～ムスターグ・アタ等)「岳人512号：1990年2月号」
12. タクラマカン砂漠横断記（黄文季著・渡辺義一郎訳)「山岳第86年」日本山岳会　1991年12月
13. 中国の氷河と気象の特性（天山での中、日合同調査に参加して)上田豊「岳人415号」1982年1月号
14. 新しき土地の古道を往く1～2（岩崎洋)「ヒマラヤ283号～284号」1995年6月号～7月号
15. 小カラコルムからパミール1～4（岩崎洋)「ヒマラヤ302号～305号」1997年1月号～4月号
16. 新疆ウイグル自治区登山の和文参考資料(1979年開放以後のもの)「ヒマラヤ336号」1999年11月号
17. アルタイ山脈　友誼峰を中国側から探る（HAJサマー・キャンプ登山隊)「ヒマラヤ336号」1999年11月号
18. 托木爾提峰登山隊2000登山報告書（日本山岳協会・新潟県山岳協会）平成12年12月30日
19. 幻のカラコルム峠と中国辺境の道（古市進)「山679号」2001年12月20日
20. サリコール地方およびカシュガルへのルートについて　スタイン著　井手マヤ訳　山書研究　№28　日本山書の会　昭和59年3月31日
21. もう一つの輝き－遠征の思い出から－（谷田川武)「ヒマラヤ282号」1995年5月号

# ＨＡＪ販売書籍案内

| 書　　名 | 価　格 | 送　料 |
|---|---|---|
| 1．雪の住処35年の記録（ＨＡＪ創立35周年記念誌） | 3，５００円 | （４５０円） |
| 2．天壇の山に挑む（ミニヤ・コンカ1991年隊） | 2，５００円 | （３１０円） |
| 3．秀麗ヌン峰を攀じる（1991年隊） | 2，０００円 | （２４０円） |
| 4．千人の悪魔の峰、マモストン・カンリ（1984年隊） | 1，０００円 | （２４０円） |
| 5．烈風の彼方へ、冬期マナスル（1982年隊） | 1，５００円 | （２４０円） |
| 6．ナンダ・カート（1981年隊事故報告） | 2，０００円 | （３４０円） |
| 7．聖地巡礼の旅（サトパント1990年隊） | 2，０００円 | （２４０円） |
| 8．“神の河”ブラマプトラの激流を下る（1990～1991年） | 2，５００円 | （２４０円） |
| 9．麗しき四川の夏　雪宝頂登頂（1991年隊） | 1，０００円 | （２４０円） |
| 10．東部カラコルム | 2，０００円 | （２４０円） |
| 11．ナマステ、サラスワティ（1992年隊） | 2，０００円 | （３１０円） |
| 12．崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰（1993年隊） | 1，０００円 | （２４０円） |
| 13．天女の山（玉虚峰）（1994年隊） | 1，０００円 | （２４０円） |
| 14．ヒマラヤ、そして仲間達へ（ケダルナート・ドーム1980年隊） | 1，５００円 | （３１０円） |
| 15．ルンポ・カンリ（1994年隊） | 1，５００円 | （２４０円） |
| 16．中国登山の手引き（第５版） | 3，０００円 | （３４０円） |
| 17．ニンチン・カンサ（1997年隊） | 1，６００円 | （２１０円） |

## ■ 寸　感 ■

暑かったり寒かったり不順な天候です。ある統計では今年の天候は1994年に似ている由。私は、久し振りにＥＸＰのない年。それでも多忙。（山）

## 事務局日誌（７月）

4日（金）　外務省へパスー登山隊の願い書、念書送付。日山協共済センターへ登山計画書送付

5日（土）　パスー隊、家族会＆壮行会（かんぽヘルスプラザ東京（54名）

6日（日）　パスー隊、別送品梱包作業（ルーム）。明治大学八千Ｍ峰全座登頂祝賀会（於、明大、山森）

8日（火）　華甲望年会該当者へ案内（24 名）パスー隊隊荷、業者渡し

9日（水）　ヒマラヤ381 号発送

11日（金）　山岳４団体三役懇談会（於、中村屋、酒井、山森、野沢井）

18日（金）　パスー隊、佐藤、岩崎、桶川、高橋ＰＫにて出発

20日（日）　パスー隊、酒井、北条、石川、加藤、吉武ＴＧにて出発

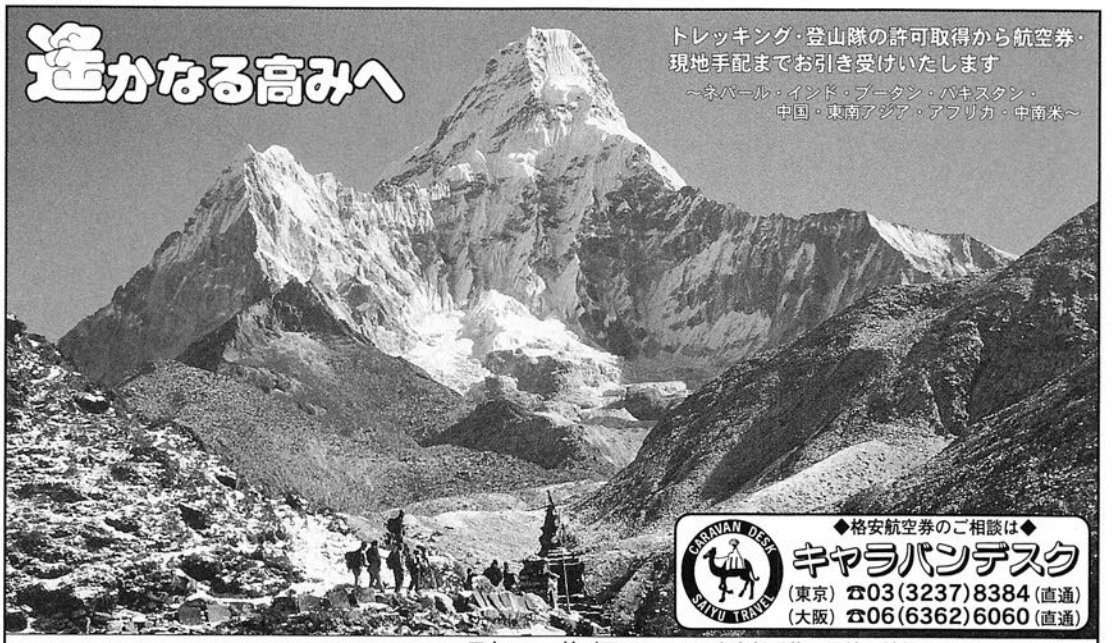
25日（金）　イエティ捜索隊励ます会（かんぽヘルスプラザ東京、多数協力）

28日（月）　東京集会（13名）

29日（火）　東京農大ローツェ～エヴェレスト連続登頂祝賀会（於、市ヶ谷アルカディア、山森）


ヒマラヤ №382（９月号）

平成15年８月10日印刷　　15年９月１日発行
発　行　人　山　森　欣　一
編　集　人　山　森　欣　一
発　行　所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋４－２－７
萬栄ビル501号
電　話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」


遥かなる高みへ
トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～
◆格安航空券のご相談は◆
キャラバンデスク
(東京) ☎03(3237)8384(直通)
(大阪) ☎06(6362)6060(直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア
株式会社 西遊旅行
国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員
西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

■本　社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2－3－1
岩波書店アネックス5F
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所／〒530-0026 大阪市北区神山町6－4 北川ビル5F
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル(通話料無料)をご利用下さい。
0120－811395



# 東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル6F
TEL:(03)3595-4830(代)
http://www.tokyo-np.co.jp/tbook

| | | |
|---|---|---|
| 最新クライミング技術 | ジム、ゲレンデのフリークライミングからマルチピッチ、アルパイン、ビッグウォールまで、すべてのロッククライマー必読の書。一つひとつの技術を単なるマニュアルとしてではなく、その意味や、選択基準までを含めて詳しく解説。実践的なクライミングのポイント、心構えなども細かくアドバイス。 | 菊地 敏之 著 1600円 |
| 山小屋の主人の炉端話 | 著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人一話の取って置きのお話。 | 工藤 隆雄 著 1500円 |
| チャレンジ！アルパインクライミング 北アルプス編 | 北アルプス全域を代表とする77のルートを分かりやすく解説したルート案内書。 | 廣川 健太郎 著 2500円 |
| すぐ役立つ 山の気象と救急法 | 山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。 | 飯田 睦治郎 桜井 博幸 著 1359円 |
| すぐ役立つ 記念日の山に登ろう | 人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はどこに。 | 石井 光造 著 1300円 |
| すぐ役立つ 山のメモ帖 | 「岳人」連載の「山の雑学ノート」から95編の話題を取り上げた、山のウンチクを深め、安全登山の指針となる一冊。 | 岳人編集部編 1400円 |
| 中高年の雪山入門 | 低山から夢のヒマラヤまで…。トラブルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しもう。 | 福島 正明 著 1600円 |
| すぐ役立つ 新・山の雑学ノート・第1集 | 山での話題が登った山の数だけではつまらない。豊かな雑学が登山をより楽しくより安全にしてくれる。 | 岳人編集部編 1400円 |
| 女性ガイドのしなやか登山術 | 常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける、女性登山ガイドのユニークな登山講座。 | 樋口 英子 著 1500円 |
| 新・山靴の音 | 還暦をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。 | 芳野 満彦 著 1262円 |
| 中高年登山なんでも百科 | 「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しめるよう、中高年登山の虎の巻。 | 福島 正明 著 1500円 |
| 登山の運動生理学百科 | 「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。 | 山本 正嘉 著 2000円 |
| 山書散策 | 今まで数多く発刊された山書。何を読んだらよいか。そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。 | 河村 正之 著 1500円 |

※本体価格に消費税が加算されます。

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

## Mt. EXPEDITION SHOP

# ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿１-16-７ ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町１-６-１(タキイビル２Ｆ) ☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町３-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町３-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町１-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町５-３ ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-４ ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-１ ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手３-４-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通２-５-１ ☎025-243-6330
●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南１-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡４-１-８ ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通１-４-５ ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通１-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西４-８ ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西３-５ ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条４-１-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条１-43-９ ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3200-7219

ICI石井スポーツ

事　務　所／〒169-0073 東京都新宿区百人町１-４-15 ☎03-3200-1004